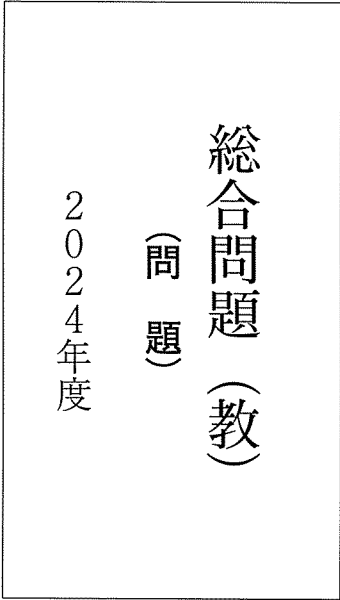




〈2024 R06180015 (総合問題 (教))〉

注 意 事 項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
 2. 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
 3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
 4. 記述解答用紙記入上の注意
 - (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
 - (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 - (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。
- | | | | | | | | | | | |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 数字見本 | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 |
|------|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
- (4) 解答に際して、文字数の指定がある場合には、改行で生じる余白および句読点も文字数に含めること。
 - (5) 解答欄に句読点を記入する際には、句読点も1マスに記入すること。
5. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
 6. 問題冊子の余白等は適宜利用してよいが、どのページも切り離さないこと。
 7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
 8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
 9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

以下の資料①は、市川伸一が著した『考えることの科学』（中央公論新社、一九九七年発刊）の第七章「推論は知識に誘導される」より抜粋したものである。また、資料②は、資料①で紹介されている研究者の一人であるホリオークが他の研究者（サガード）と共著した書籍（K.J. Holyoak and P. Thagard (1996) *Mental Leaps: analogy in creative thought*, The MIT Press.）の一部を抜粋したものである。これらの資料を読み、次の問一と問二に答えなさい。なお、解答では、改行で生じる余白および句読点も文字数に含む。

問一 資料①で省略した「放射線治療問題」の解決方法や「軍隊問題」や「消火問題」について、資料①と資料②を参考にして、次の（ア）～（ウ）に解答しなさい。

（ア） 資料①の「軍隊問題」とは、どのような話なのか。同じ内容を説明した資料②の英文について、その概要を一〇〇字以内で説明しなさい。

（イ） 資料①で省略した「放射線治療問題」に対する有効な解答の一つとは何か。資料①と資料②を参考にして、四〇字以内で説明しなさい。

（ウ） 資料①の「消火問題」が「放射線治療問題」に対する有効なヒントとなるためには、どのような条件が記されているべきか。資料①と資料②を参考にして、六〇字以内で説明しなさい。（なお、条件の主旨が同じであれば、出典の文章と異なってもよい。）

問二 資料①において著者が述べている学習者の記憶や理解の特徴のうち、学習者の理解を妨げられるものがある。何かを学ぶ場面で、学習者はどのような点に留意していくことが望ましいといえるか。あなたの意見を二〇〇字以内で述べなさい。

資料① 市川伸一著『考えることの科学』の第七章「推論は知識に誘導される」（一部抜粋）

問題解決における推論

（前略）最も高次の思考活動とされる問題解決について、推論と知識がどのようにかかわっているかを見てみよう。与えられた条件のもとで解を導く。問題解決は、まさに推論の連続である。では、問題解決のプロセスでどのような知識が使われ、推論が行なわれているのだろうか。はじめは、算数や数学の問題を例にとって考えてみよう。

まず、問題状況を理解するプロセスがある。これは、知覚や文章理解と同様に、知識を使いながら状況の表象をつくることといえる。ここでは、さまざまな問題スキーマ（註１）、つまり問題のタイプとかパターンについての知識が使われるだろう。算数の問題文を読んで、ソルとカメが出てきたので「ああ、きつとソルカメ算だろう」と「ソルカメ算スキーマ」を呼び出せば、それに基づいて問題をさらに読み進むことになる。状況の手がかりからスキーマを呼び出すことと、呼び出したスキーマを使って状況を解釈することという推論がここにはある。登場する動物が違って、ダチョウとゾウになったり、もつと変形されてタコとイカになったりすると、ソルカメ算スキーマの呼び出しは難しくなる。そして、もし適切なスキーマが呼び出せない「新手の問題」のときには、とりあえず文字通りに問題文を理解しておくなり、状況を正確に把握しておくしかない。

次に、解法を探すというプロセスでの推論がある。すでに問題スキーマができているようなものなら、解決の手続き的な知識（註２）が付随している場合が多いに違いない。それを適用して解けるなら、話は簡単である。解法の記憶があやふやな場合もあるだろうが、「だいたいこんなふうにすれば解けたはずだ」ということで、解き進んでいける。では、スキーマをうまく呼び出せなかったときは、どうするだろうか。この場合は、より一般

的な方略を使うこととなる。たとえば「問題を図に表わし、状況を把握しやすくする」、「下位問題に分割して、とりあえずの目標を立てる」、「過去に解いた似たような問題を思い出して類推する」などである。これらは、ヒューリスティックスであるが、確率判断の領域とはややニュアンスが違い、肯定的な意味で使われている。つまり解法の発見を促すような「うまい方針」ということになる。ヒューリスティックスには、もっと細かい条件によって呼び出されるもの（たとえば受験数学で使われる「大小比較の問題は、差をとって符号を判定せよ」というようなテクニク）もあるが、こうなるとしだいに「スキーマに付随する手続き的な知識」と近いものになってくる。

問題解決をどれくらい知識に頼るかというのは、かなり個人差や「好み」があるように思われる。たとえば初期の人工知能研究者たちは、一般的なヒューリスティックスを重視した。これは当時コンピュータの容量からいっても、知識表現の技術からいっても、やむをえないことだった。また、より少ない法則や手順で多くの問題を解くという節約の原理にもなっている。正統派の数学者もそうではないだろうか。問題のパターンを覚え込んでそれで解くというのは、未知の問題に立ち向かう能力とはいえないし、第一ウツクシくない。できるだけ知識は少なく、応用できる範囲は広いもの（解き方ないしは学習者）をよしとするコンセンサスがあるように思える。しかし、文章理解の研究と同様、初期の人工知能のいきづまりや、エキスパート（専門的な技能をもった熟達者）についての認知心理学的研究を経て、一九七〇年代には、**領域固有の知識**が必要なが強調されるようになる。たとえば、物理学の問題をスラスラと解く研究者などの解決過程を見ると、実に多くの問題スキーマや解法の手続きをもっていることがわかる。チェスや将棋などのプレイヤーも同様である。彼らは、たとえ本人が直接意識していなくても、長い間の問題解決経験を知識として蓄積し利用している。認知心理学では、ヒューリスティックスや解法の手続きなども含めて「知識」と呼ぶことが多い。その上で「問題解決は知識である」という言い方をするのである。

ところが、ときおり受験指南書で見かけるような「数学は暗記科目であり、問題の解法パターンを覚えれば、だれでもできるようにする」という意見にも、私はけつして賛成できない。問題スキーマを形成することや、それを使って問題を解くことの難しさを考慮することなく、ただ正解を眺めたり、たくさん問題を解いていればだれでも自動的に解けるようになるという印象を与えているからである。もちろん、そうした方法で問題が解けるようになる人もいるし、応用力がつく人もいる。しかし、それは数学に関する概念的な知識を使いながら解答を理解したり、問題スキーマやヒューリスティックスを個々の問題に適用するための補助的な知識をつくりあげるということを意識的、あるいは無意識的に行なっているためと思われる。

問題を解いた経験が他の問題の解決を促進するということは、心理学では**転移** (transfer) という現象として扱われてきた。自然に類推が生じて、転移がうまく起こるのはけつこう難しいことが、実験的に確かめられている。この分野の古典的な問題としてドゥンカー (K.Dunker) の「放射線治療問題」がある。ご存知の方も多いかもしれないが、ひとまず紹介しておこう。

放射線治療問題 胃の中に悪性の腫瘍のある患者がいるが、手術による摘出が不可能である。放射線によって破壊することができるが、十分な強度を与えると、それによって正常な組織も破壊されてしまう。弱くすると、正常な組織は安全だが、腫瘍が治療できない。どうすれば、腫瘍だけを破壊できるだろうか。

この問題に対する有効な解答の一つは、【問一(イ)】 ことである。答えを聞いてしまえば簡単なようだが、けつこう難しい。この問題の前に類似の問題を解くことによって、転移が生じるかどうかということをさまざまな研究者が調べている。とりわけおもしろいと思うのは、ジック (M.L.Gick) とホリオークによる実験である。次の問題は、彼らが類似問題として使ったのを少し脚色したものである（註：本試験問題では、設

問の関係で記載内容の全部、あるいは一部を省略している)。

軍隊問題 ……

【問一(ア)】

消火問題 ……ある建物で火事が起きた。かなり火が激しく、相当の量の消火剤を外から放射しないと消えそうにない。

【問一(ウ)】

さて、どのようにして火を消したらいいだろうか。

(中略) こうした問題を先に与えることによって、どれくらい転移が生じるだろうか。実験の結果では、単にこうした問題の解を聞いても、なかなか自発的にヒントとしては利用されないという。転移が生じたのは、「この問題がヒントになっている」とあからさまに教示された場合が一つである。

もう一つの場合というのは、これら二つの類似問題の解を聞いて、「いったいどのような話だったか」を要約させたときに、「(省略) 類似問題の共通した内容について、妥当な解釈から導いた要約」というまとめ方をした被験者たちである。これは、いわば「収束スキーマ」とでもいうべき問題スキーマを形成したことになると、ジックとホリオークは言う。いくら問題とその解を聞いても、「要するに、努力すれば報われたという話」というようにまとめた被験者たちは、さっぱり報われなかったのだ。

ちなみに、私はここ数年、学習相談室を大学の研究室に設置して、小・中・高校生の教科学習の個別相談・指導に応じるという活動を行なっている。その中で、子どもたちのふだんの学習の様子を聞いてみると、問題が解けるにせよ、解けないにせよ、やりっぱなしのことが多いのが目につく。一日何時間勉強したか、何ページ問題を解いたか、ということにばかり注意が向いてしまうようなのだ。私たちの学習指導では、問題解決プロセスの最後における重要な「推論」として、「なぜはじめはうまく解けなかったのかを考えて、一般的な教訓として引き出す」ということを強調している。これは、問題理解と解法発見における推論プロセスに焦点をあててきた認知心理学的研究においてさえも、盲点となっていたように思える。ジックとホリオークの研究が示すように、解をやっと出したり、わからなくて正解を聞いた後にこそ、その経験から何を引き出すかが、次の機会への転移を促す重要な要因となるのである。

(註1) スキーマ (schema) については、市川伸一著『考えることの科学』において、本問題の引用箇所(資料①)の前に、次のような文章により紹介されている。

「会話や文章の理解において私たちが使う知識体系は、一般にスキーマ (schema) と呼ばれている。心理学でこの用語が導入されたのは認知心理学の成立よりも古く、一九三〇年代にさかのぼる。イギリスの心理学者バートレット (E.C.Bartlett) は、大学生を被験者としてアメリカ・インディアンに伝わる民話を用いて記憶実験を行なった。このようななじみのない話を聞くと、再生されるたびにストーリーがどんどん変わってしまう。記憶というのは、聞き手のスキーマに適合するように解釈され、変容されていくものである。これは、テープレコーダーやビデオの『記録』と、人間の記憶との大きな違いである。」

(註2) 手続きの知識とは、行為に関する知識であり、繰り返し行うことで意識せずに秩序だった行動が可能になる知識のこと。例えば、自転車の乗り方などは、反復練習により、次に何をすべきかを常に意識しなくても、乗りこなすことができるようになる。

※ 資料①での文献の引用に際して、本文中の注釈の追加、表記の変更、文章の一部省略を行った。

資料② K.J.Holyoak and P.Thagard (1995) *Mental Leaps : analogy in creative thought*, The MIT Press. (一部抜粋)

The Fortress Story (from Gick and Holyoak, 1980)

※ページ下部に出典を追記しております。

A small country fell under the iron rule of a dictator. The dictator ruled the country from a strong fortress. The fortress was situated in the middle of the country, surrounded by farms and villages. Many roads radiated outward from the fortress like spokes on a wheel. A great general arose who raised a large army at the border and vowed to capture the fortress and free the country of the dictator. The general knew that if his entire army could attack the fortress at once it could be captured. His troops were poised at the head of one of the roads leading to the fortress, ready to attack. However, a spy brought the general a disturbing report. The ruthless dictator had planted mines on each of the roads. The mines were set so that small bodies of men could pass over them safely, since the dictator needed to be able to move troops and workers to and from the fortress. However, any large force would detonate the mines. Not only would this blow up the road and render it impassable, but the dictator would destroy many villages in retaliation. A full-scale direct attack on the fortress therefore appeared impossible.

The general, however, was undaunted. He divided his army up into small groups and dispatched each group to the head of a different road. When all was ready he gave the signal, and each group charged down a different road. All of the small groups passed safely over the mines, and the army then attacked the fortress in full strength. In this way, the general was able to capture the fortress and overthrow the dictator.

[注] dictator 独裁者／fortress 要塞／radiated outward from～放射状に外に／border 国境／vowed to～と誓う／troops 軍隊／
poised at 態勢を整えた／disturbing 不穏な／detonate 爆轟する／undaunted 臆することなく／dispatched 派遣された

※WEB 掲載に際し、以下のとおり出典を追記しております。
From: Analogical problem solving,
Mary L. Gick and Keith J. Holyoak.
Copyright © 1980 by Elsevier Inc.
Reproduced with permission of the
Licensor through PLSclear.

以下の資料③は、竹内愼^{たけうち けん}が著した『生きるための図書館——一人ひとりのために』（岩波新書、二〇一九年）より抜粋したものである。この資料を読み、次の問三、問四に答えなさい。なお、解答では、改行で生じる余白および句読点も文字数に含む。

問三 読書や図書館のために様々な努力する人たちが、仕事を通して何を学び、どのように考えながら活動しているのか。「図書館員」・「出版関係者」・「市民団体関係者」の三つの立場から一つ選び、本文中の語を用いながら一〇〇字以内で説明しなさい。

問四 「一人の人」の問題解決への援助、という観点から、筆者は図書館を生涯学習の基盤であると捉えている。筆者の主張をふまえながら、人々は図書館をどのように活用していくのが望ましいとあなたは考えるか、二〇〇字以内で述べなさい。

資料③ 竹内愼^{たけうち けん}『生きるための図書館——一人ひとりのために』（一部抜粋）

昔からの本の形ばかりでなく、今は音声や映像の記録が、新しい形で次々と出てきました。ここでは煩雑を避け、それらを一括して「本」と呼びたいと思います。

これは人間が感じ取ったり、考えたり、行動したりしたこと、その分析、検討の記録です。それは、内容も形態もまことに個性的で、多種多様です。そこでその特徴を組み合わせることで理解を助けるのが、これからの図書館の新しい活動となることでしょう。

人もまた、一人ひとり違います。何人かで同じテーマを調べると、その考え方も、その人の持つ条件も、それぞれに違います。ただ、初めてその仕事をするときにどうしたらよいか迷い、調べはじめて壁にぶつかり、困るという点では、よく似ています。

それに対して、できるだけ多種多様な「本」を備えて、読者が見つけやすいように用意するのが図書館です。その存在を読者に知らせるのには、「本」そのものが読者に語りかける方法と、「本」の語ることを聞き取って、図書館員がそれを人に伝える方法との二つがあります。

図書館では本を新着書架に並べたり、時の話題でまとめて展示をしたり、著者名、書名、出版社名をすぐ目に見えるように、その面を上にして目立つところに置いたり（面展示とか面出しと言います）して、本が読者に語りかけるようにします。新着書ばかりではなく、蔵書を公開書架上に並べること自体が本の言葉を聞く場なのです。

また、図書館の広報に新着書のリストを載せたり、蔵書の中から一つのテーマにかかわるさまざまな本を取り上げて紹介したりします。こういったことが公開書架では探しにくい本と人をつなぎます。また、子どもたちのためのお話し会では、本というものは面白いもの、楽しいものであることを伝えるのが目的ですが、その時のお話やブックトークは、著者に代わってその思いを子どもたちに伝える仕事です。つまり、この時の主役は著者ですから、担当者は著者が何を語りたいかを事前によく考え、どう表現するかを慎重に考えるのです。

図書館には、相談係とか参考係というデスクに司書を置いています。蔵書の利用だけでなく、図書館で働く人の知識や経験を利用できるのです。この人は、本の世界の道案内人ですから、読者が目的の本を見つけるまでは、本棚のあいだを歩いていっしょに探してくれます。

でも読者に代わって本を読み、問題を解決することはしません。わからないことを自分で解決できた喜びは、その読者のものです。それがその人の次の問題解決に役立ちます。この質問は、その人のプライバシーの一つですから、図書館で働く人はその秘密を守ります。

そして、この本を読みなさい、と押しつけるのではなく、いくつかの本を見せて「この中で貴方のお役に立つものがありましたら」というのが本来の方法です。それには図書館員の経験と知識の蓄積が必要です。さらに、図書館には選書から始まって「本」の整理や保管、貸し出しに至るまでさまざまな仕事がありますが、その全部が充実し、組織化されて、やっと「本と人をつなぐ仕事」ができます。その一館で解決できない質問に対しては、図書館という組織全体がそれを支えます。

こうした案内を受けるうちに、読者は、自分に必要なものを探す方法を自然に理解するでしょう。司書が本を見せながら具体的に説明することで、それがわかってくるのです。だから図書館は「教え込まれるところ」ではなく、「自分の感覚を働かせて学び取るところ」です。

昔から「読み、書き、計算する能力」を人間の知的能力としてきましたが、今は図書館で「必要なものを探す能力」を身につけるようになったのです。これは、一生使える能力です。こうした学び方にまだ慣れていない人には、必要な手ほどきをします。それが、その人と「本」とをつなぐ入り口になることでしょう。

二一世紀に入って、大きな災害が続きますし、また来るといわれている大震災への備えも強調されています。そんな中で突然の被害からやっと自分を取り戻した人が、避難生活の中で一人になれる場所を図書館に求め、持ち帰って読む本を探し、次いで被災の処理や連絡のために図書館を使う、という生活のパターンが各地から報告されています。図書館とは本好きの人たちが行く特別なところ、という長い間のイメージが、災害から立ち上がるための一つのよりどころにまで変わってきたのです。それには、災害発生以前の図書館サービスがあつてこそ、です。

もう一つ大事なことは、子どもたちのことです。大人は図書館の復興を待ってくれますが、子どもたちの心の痛手に対しては、最初の一週間が大事だ、といわれています。読み聞かせにもお話にも、絵本の提供にも、大きな恐れに直面した子どもたちの心を癒すこまやかな配慮が必要です。これもまた普段からの準備と、災害後すぐに動きだせる態勢、行政の理解と施策が必要ですし、子どもの成熟と成長にかかわる人たちみんなで考え、準備を重ねるべきことの一つでしょう。図書館はそのための本の供給源であり、混乱の中にあつても、実施の場として働くのだと思います。

ここで述べた「一人の人」の問題解決への援助が、学校図書館でも大学図書館でも、また県および市町村立図書館でも用意されていて、「わからないと思ったことが自分にもわかる」と思い、「できないと思ったことが自分にもできる」という喜びを持つことができるのは、人が生きるうえで大事なことでないでしょうか。

今日、学校教育の普及によって、教育とは集団でおこなうものと考えられているようです。しかし、その教育の受け手からいえば、それに乗り切れない自分がある。そこに、成績評価とは関係のない司書から、自分に適した援助が得られ、それにより自分が選ぶことを重ねて力を育て、問題を解決することが期待されます。

ただ、その力がいつ動きますかはわかりません。それを「待つ」のが図書館です。これは、人の成熟と成長にかかわる仕事として、教育のうちですが、本人の力の発動を「待つ」という点で、「育」の分野です。そして「教」と「育」とを体験した人が、それを自分の中で総合することで、その人の「教+育」が形成されるのでしょうか。これには長い時間がかかりますが、これこそ生涯学習の基盤ではないでしょうか。

この、一人の人の可能性を大事にすることは、教育現場では以前からあたりまえのことでしたが、今日ではそれが見えにくくなっていると思います。さらに、読書とは個人の努力の一つであり、必要な本は自分で買うべきだ、という考え方もありました。それを公費によって多種多様な本を集め、それぞれの人のその時の感性や理解力に応じて、本来の力の成長を援助しようという考え方に進んできたのです。

図書館があるから本を買う必要はない、というのではなく、図書館で見て、自分に必要だと思ったから買う、という考えが自然に生まれてくるのです。例えば生徒たちと学校司書、あるいは生徒どうしの会話の中に、こういう「人と本とのかかわり」が見えてくるのです。

今後は、それぞれの「本」の長所を組み合わせ、内容の理解を進めることが多くなるでしょう。ものの動きを知るとか、普段は近づけないものを見る臨場感（じくせん）は映像の独擅場（どくせん）ですし、言葉の陰翳（いんえい）を知るためには音声の記録が適切です。また、電子媒体の場合には、今までの本ではできなかったさまざまな機能が加えられて、まことに便利です。一方、従来の本は、抽象的な思考に至るモデルでもありますし、また一行ずつ、一ページずつをたどって著者との対話に導かれ、その考えの理解に至る一時にはそれを超えることもある一ものです。

また、同じ本を繰り返し読むことで、そのたびに新しい面が開けることもあります。それは、著者の考えを本という形にまとめるために、編集者をはじめ、さまざまな分野の専門知識を総合していますから、その全体も細部も、ともにその内容の表現なのです。そこで本は一国の文化の表徴ともいわれます。また、紙の上に印字をすることからくる安定性も、分析し思索を深めるためには必要だという生物学者からの提言もあります。もう一つ、幼い時に読んだ本を後年手にすると、そのころの自分に出会える、というのも、本ならではのことです。

「ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とする」といった吉田兼好、「一日に一五分、決まった時間に読書を」といったルイス・シヨアーズ（米国図書館学者、一九六〇年代の国際的指導者の一人）、「卒業後は毎晩一ページ、洋書を読みなさい」と学生に諭した石橋湛山（なんざん）（元首相）の言葉は知識の獲得だけでなく、静かな「自分の時間」を持つことが大事だ、といっているのかもしれませんが。

さらにいえば、思索を深めるのに、便利さだけでいいのか、無駄とも思える思考の低迷や遍歴も必要ではないのでしょうか。読書の価値は、そういうところにもあるうか、と思います。

そこで本と新しい媒体の組み合わせと、誰もがそれを自由に使える条件が必要です。それには、それぞれの組み合わせを援助する「本と人をつなぐ人」とその考え方が大事になります。

図書館員は、目標を一人ひとりの読者に据えて、毎日の図書館サービスの充実を図るのは当然ですが、それを考える補助線のようなものはないでしょうか。それがないと、熱意が空回りをするばかりで、読者の求めるものとは違った方向に走る恐れがあります。世の中で、作り手の論理と受け手の感覚とは、往々にして食い違うからです。この場合、私見では縦と横とのラインで考えたらどうかと思っています。

まず縦のラインは、図書館とは本来何なのか、という理念を掘り下げること、そしてその図書館の設置目的に従ってそれぞれの分野の本を知り、読者の要求を知って、どういうサービスを提供するかを組み立てます。それをまとめて、その時の到達目標を考え、さらに将来の理想像を立ち上げたいと思います。

横のラインは、図書館を取り巻く広い世界に目を向けることです。図書館は「本」にかかわるさまざまな分野の人たちに囲まれて、図書館として存在しています。その人々には、まず著者、次にその著作を本の形にする人（編集者、装丁家、印刷者、製本師、製紙業その他本の材料となるものを生産、供給する人々）、本の流通業者、書店員、古書店員、傷んだ本を修復する製本師（も）（諸製本と呼ばれ、一冊の本に長い生命を与える仕事。出版製本の原型でもあり、現在では国際的な広がりや深さを持ちます）、写本を持つ個人や機関、さらにそれぞれの仕事の道具や用品を作り、供給する人々など、そして、読者、今は読まなくてもいずれは読むかもしれない人々が含まれます。

この人たちの本についての思いや考え方、現実の状況を知ることが、図書館活動を広げ、深めることでしよう。こういう人たちの本づくりにかける思いは、この本で述べた図書館員の仕事に対する熱意と努力とに通じ合うものがあると思います。表面には現れないかもしれませんが、こちらにそれがあれば、いろいろな面から感じ取ることができましよう。そこから学ぶべきことは大きいと思います。

この思いが、今までの縦割り状況を破って、横のつながりを作り出しています。

一九九三年、「子どもと本の出会いの会」が結成されました。これは、さまざまな分野の人たちを網羅して、日本で最初の国際子ども図書館（国立）の設立計画に賛同し、その設立を広い立場から支援するものでした。横の広がり（の顕著な例）と言えましよう。この団体は、二〇〇二年、上野に国立国会図書館の分館として国際子ども

図書館が設立されたことで、その使命を終わり、解散しました。

NPOブックスタート（二〇〇〇年発足）は出版界を基盤としてすべての赤ちゃんに本を届ける活動をしています。これによって保健所、図書館、保育園、市町村の関係部局などを横につなぎ、赤ちゃんの時から絵本に親しむ生活環境づくりへの理解と協力を生みました。それまで図書館とは無縁であった若い母親たちが、保健所での定期健診の時にこの活動を知り、新しい読者になっています。

鳥取県でおこなわれた「本の国体ブックインとっとり⁸⁷「日本の出版文化展」」（地方出版物を主体とした展示会）やその主催団体「本の学校」の活動も、従来の壁を超えて、本を楽しみ、本について考える広場を作ろうとしています。また、高校生や大学生が参加する「ビブリオバトル」の活動は、読者がこれと思う本を持ち寄り、五分間でそれを紹介、その中からその日の「チャンプ本」を投票によって決めています。これもまた、本についてのさまざまな見方を横につなぐものといえます。

さらに日本書籍出版協会は、出版活動の前向きな発展のためには、図書館の資料費の増額が必要と考えて、二〇一六年三月、「図書館資料購入費、図書館整備充実に関わる経費について」を文部科学大臣宛てに提出し、このところ低落が続いている図書購入費の増額を強く要望しました。このように「横のつながり」は、今、次々と広がっているといえましょう。そこから社会全般につながると思います。

※ 資料③での文献の引用に際して、本文中の見出し等の文章の一部を省略した。

〔以下 余白〕

〈2024 R 06180015 (総合問題 (教))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

採点欄	問一 (ア)		問一 (イ)		問一 (ウ)		問二		問三		問四	
	+	−	+	−	+	−	+	−	+	−	+	−

〈2024 R 06180015 (総合問題 (教))〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入してはならない。記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

総合問題 (教)

(解答用紙)

- 注 意
1. 受験番号 (算用数字)・氏名は指示に従ってただちに所定欄に記入し、それ以外に記入してはならない。

2. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。

3. 解答はHBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで書くこと。

4. 試験終了時にはこの解答用紙を裏返して机の上に置き、指示を待つこと。

5. 文字数の指定がある場合には、改行で生じる余白および句読点も文字数に含めること。

6. 解答欄に句読点を記入する際には、句読点も1マスに記入すること。

問一	(ア)				5				10				15				20				25				30
	(イ)																								
	(ウ)																								

問一 (ア)	
+	−

問一 (イ)	
+	−

問一 (ウ)	
+	−

問二					5				10				15				20				25				30

問二	
+	−

問三	選んだ立場																											
						5				10					15					20				25				30

問三	
+	−

問四					5				10				15				20				25				30

問四	
+	−